

『伊曾保物語』天草版と国字本の成立過程に関連する 翻訳上の諸点

Some points on the translation of *Isoho monogatari* in relation to its formation process

兵頭 俊樹

Toshiki HYODO

和歌山大学クロスカル教育機構教養・協働教育部門

Abstract

In the first half of this paper, I will focus on the expression, "force alone," in the moral of "The Wolf and the Sheep" in *Isoho Monogatari*, and trace the flow from the Steinhöwels *Aesop* to the Amakusa edition via the Spanish edition, and then to the Japanese orthography text. In the second half of the paper, I will take six stories from the so-called *Aesopus Dorpii* and confirm that they are a part of the basis of the Amakusa edition. This may help to disprove the urtext theory.

キーワード/Keywords シュタインヘーヴェル Steinhöwel、ドルプ Dorp、ヴァッラ Valla、アルドゥス Aldus、伊曾保物語

はじめに

昨年の拙稿『『伊曾保物語』の翻訳底本から文語祖本説の再検討へ』(2021)では、天草版下巻と国字本で共通する「狐と野牛」と「鷲と鳥」の2話の底本(シュタインヘーヴェル本とドルプ本)の違いを明らかにし、天草版下巻の底本としてルネサンス期の特徴を備えた16世紀のドルプ本の概略を述べ、さらにドルプ本において複数の訳者による訳があるものを2話選んで天草版下巻の話との対応関係を論じた。天草版下巻の底本が明らかになれば文語祖本を想定する必要がなくなることも考えられ、祖本説を検証して、祖本の存在を否定する根拠を述べた¹⁾。

本稿はある意味では前稿の続きでもある。今回は前半で、「狼と羊」(天草版上巻1・国字本中巻11)の後置教訓部分に見られる「ただ権柄(権威)」という表現に着目して、シュタインヘーヴェル羅独本から同系スペイン語版を経て天草版、さらには国字本へと続く流れをたどってみる。また後半では、ドルプ本の中のヴァッラ(Valla)による訳を3話、その底本にも言及しながら比較的詳しく取り上げ、これとは別に無名氏によ

る (incerto interprete) 訳とされている 3 話の訳も試みて、天草版下巻がドルプ本を底本にしていることを確認する²。

前稿同様本稿でも寓話部の成立過程をおよそ次のように想定する。祖本説は考慮していない。

- 1) シュタインヘーヴェル本 (Romulus, extravagantes, Rimicius, Avianus, collect[a]e) から
 - a) 羅独版(1476 頃)→スペイン語版(1546 以後)→天草版上巻(1593)[25 話]→国字本[24 話]
 - b) 羅独版(1476 頃)→スペイン語版(1546 以後)—————→国字本[40 話]
- 2) ドルプ本 (Valla, incerto interprete, Goudanus, Barlandus, Rimicius) から

ドルプ本 (1536 以降)—————→天草版下巻(1593)[45 話]³

天草版上巻と国字本に共通する 24 話については、話の順がシュタインヘーヴェル本と全く一致する。これに対して国字本にしか存在しない話は何箇所か順序が変則的である。口語体の天草版 25 話が先に成立し、その順に従い 1 話を削って国字本がこれを文語訳し、その後でこれらの話の間に、原則的にはシュタインヘーヴェルの順に拠りながら、新たな 40 話を挿入していったが、その際なんらかの編集上の意図があって何箇所か順が変更されたと考えるのが合理的ではなかろうか。

天草版下巻については、下巻 2-6, 8 ←Valla; 9-12, 14-19 ←incerto interprete; 20-24 ←Goudanus; 29 ←Barlandus; 30 ←Valla; 33-37, 39 ←incerto interprete; 41-43 ←Goudanus; 44 ←Remicius から訳されたと考えられる。ここに挙げたのは、ドルプ本の中で訳者が複数にまたがらないものと、複数の訳者にまたがっていても対応が確実であると判断できるものである。これ以外の天草版下巻 1, 7, 13, 25-28, 31-32, 38, 40, 45 の 12 話は、いずれもドルプ本での訳者が複数にまたがりなお詳しい検討を要する⁴。

1. 天草版上巻 1・国字本中巻 11「狼と羊」の後置教訓

狼が川上で、子羊が川下で水を飲んでいたら、水を濁らしたと狼が羊に言いがかりをつける。羊が反論すると、狼は他にもさらにいいがかりを重ね、ついには問答無用とばかりに羊を食ってやると言う話。この話の後置教訓は天草版も国字本も多少の語句の違いはあるが意味するところはほぼ同じである。

「道理を育てぬ悪人に対しては、善人の道理と、その^{へりくだ}謙りも役に立たず、ただ権柄ばかりを用ようずる儀ぢや」(天草版)⁵

「理非を知ぬ悪人には、是非を論じて詮なし。只權威と堪忍とをもつてむかふべし。(国字本)⁶

他の諸々のことはさておき、この話のこの教訓だけを比べてみて、どちらが先に成立したのか推測はできないだろうか。

1. 1 「狼と羊」の話の権柄(權威)

道理は理非と、謙りは堪忍と、権柄は權威と同義だとする。狼の言いがかりに反論しても効果がないから、羊は我慢するか他からの力が必要だという全体の意味はほぼ同じであるが、表現が微妙に違う。天草版は後半部で、我慢しても無駄だから他からの力が

必要だという、ごく自然な理由から結論へと続く。対して国字本は力と我慢を一括りにして、これで対処すべきだという結論になる。天草版の表現を前提としなければ、国字本の「権威と堪忍とをもつてむかふべし」という表現は生まれにくいように思われる。

いまはその先後関係を置き、次に果たして天草版と国字本のこの教訓が寓話の内容にふさわしいものかどうかを考えてみたい。この狼と羊の話そのものには権柄(権威)は直接には関わっていない。たとえば本稿 3.1 で扱う「鶏と犬」の話のように、狐に襲われそうになった鶏が、同盟相手の犬を呼んで狐をかみ殺させるというのであれば、この教訓はまだふさわしい。ところがこの「狼と羊」の話においては、悪人に対抗するのに自分の力では及ばない場合、権柄すなわち公権力に頼るべきだというのはあくまでも一般論であって、この話そのものからは出てこないはずの教訓である。

この後置教訓の部分がじつは底本との関係を探るうえで非常に興味深い。シュタインヘーヴェル羅独本 Romulus^{1,2} では「道理と真実 ratio et veritas; vernunft und warhait (Vernunft und Wahrheit)」が役に立たないと述べられるだけである。スペイン語版ではこの「真実も道理も...ない no ...verdad ni razon」に加えてさらに、「何も彼ら(悪党ども)に対抗するのに有効ではない、ただ力のほかには ni vale otra cosa contra ellos salvo la fuerza sola」という表現が加わっている。ここに現れる「ただ力だけ la fuerza sola」という語句を天草版が「権柄ばかり」と訳し、これをさらに国字本が「権威」と変えた考えられる⁷。

1. 2 Nevelet の無名氏訳とシュタインヘーヴェル独訳とスペイン語版

「道理・是非」は羅独本からスペイン語版を経て『伊曾保物語』に入ったのに対し、「権柄・権威」はスペイン語版で初めて「ただ力のみ」として加わった後に入った。ほかにもこの話の教訓部に関して、スペイン語版で付け加わった箇所があることが指摘されている。天草版・国字本との関係を考えるうえでも興味深い指摘なので少し詳しくみていきたい。

シュタインヘーヴェル本のロムルス集 4 巻のうち初めの 3 巻は、Romulus の各寓話の後に、2 行連句 (distich) を多くの場合 10 数行ほど連ねた Anonymus Neveleti (= Walter of England) による韻文バージョンが添えられている⁸。これは中世にはよく読まれたらしいが、技巧を凝らした表現が目につきすぎるといふ指摘もある。その後置教訓に相当する部分は簡潔で鋭く 2 行連句の持ち味がよく発揮されているという。そしてシュタインヘーヴェルがこの教訓部を独訳に取り入れることがあり、さらにはスペイン語版も——独訳を飛び越して——2 行連句を敷衍するという。以下このことを論じている D. Beyerle の「15 世紀のスペイン語版イソップ」という論文からの引用(訳)である。

「狼と羊」(I, 2) の寓話の後置教訓を比較してみよう。まず、シュタインヘーヴェルの『イソップ』に載る 3 種のバージョンは以下のとおり。

*ロムルス「この寓話が示すのは、たちの悪い濫訴者には**道理も真実も** (ratio et veritas) 通用しないということ。」

* Nevelet の無名氏「このように有害な者は無垢な者を害し、害する理由をでっちあげる。このような狼 (lupi) がどの町をも闊歩している。」

* シュタインヘーヴェルによる独訳「この寓話でイソップが示そうとするのは、たちが悪く信義を破る告訴人には**道理も真実も** (vernunft vnd warhait) 通用しないということ。このような狼 (wolf) はあらゆる町にいる。」

* スペイン語版もこの独訳と同様に後置教訓を敷衍している。「この寓話が示すのは、人を欺く悪い奴らには**真実も道理も** (la verdad nin rrazon) 通用せず、奴らに対しては**力以外のなにものも** (saluo la fuerça sola) 有効ではないということだ。このような狼 (lobos) はどこにでもいる。**暴虐によって、機を窺い貧しく無垢な者たちのたぎる血を啜る奴らだ** ?。

独訳もスペイン語版も、ロムルスの教訓と Nevelet の無名氏の教訓を結びつけている。スペイン語版の訳者はシュタインヘーヴェルの独訳よりもはるかに大胆であり、ロムルスの諦めに似た言い回しに「ただ力だけが fuerça sola」という積極的なスローガンを付け加える。そしてさらに Nevelet の無名氏の「害する理由をでっちあげる causamque nocendi / Inuenit」という表現を拡張するが、これがまた寓話の筋とさらに緊密に結びつく。(D. Beyerle, p.323-24. 綴りは Beyerle に従った。太字は筆者)

1. 3 天草版から国字本へ

この寓話そのものからは、悪人には真実と道理が通用しないという教訓は得られる。しかし第3者の力に頼るべきだという教訓は直接には出てこない。それはあくまでも一般論としての解決策である。このように寓話そのものからは直接に導き出しがたい教訓を、天草版が「悪人に対しては...権柄ばかりを用ようずる儀ぢや」とし¹⁰、スペイン語版の「力以外のなにものも彼らには対抗できない」と共有しているということは、両者が翻訳と底本の関係にあることの有力な根拠となるだろう。

「権威と堪忍」を一括りにして整理した国字本の表現は少し分かりにくい¹¹、国字本に基づくと思われる江戸後期の『絵入教訓近道』では、この部分の表現が「権威で向かふか堪忍であしらふか」と明瞭となり、さらにもう一つの道を教える「さもなくては遠去かり逃れて」。逃げるが勝である。一括りにした国字本の「権威と堪忍」は「謙りも役に立たず、ただ権柄ばかりを」という天草版を前提としなければおそらく生まれなかったろう。こうしたことを考え合わせると、シュタインヘーヴェル羅独本から、スペイン語訳を経由して、天草版に至り、そこからさらに国字本へと連なっていく流れが見えてくるように思える。各版のキーワードを整理してみる。

	道理と真実	我慢	力	逃げるが勝ち	このような狼ども
羅 Romulus	ratio et veritas	×	×	×	×
羅 Anon.Nev.	×	×	×	×	hi...lupi...
独 St.訳	Vernunft und Wahrheit	×	×	×	solch Wölfe...
スペイン語版	no...verdad ni razón	×	fuerza	×	semejantes lobos...
天草版	道理	謙り	権柄	×	×

国字本	是非	堪忍	権威	×	×
絵入教訓近道	是非	堪忍	権威	遠去かり逃れて	×

2 ドルプ本 Valla 訳

ドルプ本の Valla による訳を 3 話とりあげる。Valla はイソップ寓話を 33 話訳しているが、そのうち天草版下巻に関わるのは 10 話ほどである。以下 Valla の話はドルプ本における順を記す。Rem. はリヌッチョが訳した 100 話と共通する話を示す。イソップ寓話のギリシア語写本は大きく I・II・III で表記される 3 つのグループに分けられる。

¹² I がもっとも古く正統であり、II・III はそれからの派生的な位置づけである。Perry はこのうち I を基礎に校訂版を出している。今日の標準的な版であり中務訳もこれに基づき、本稿で Perry の邦訳はこれに拠る。Hausrath と Chambry は校訂版で I・II・III のテキストを並置している。Rem. が基づいたであろう写本は II に、Valla のは III に属すると推測されている。

2. 1 Valla 13 「羊飼いと海」→ 天草版下巻 4 「大海と野人のこと」

Valla 13 [Dorp], Rem. 91, Perry 207, Hausrath 223

Valla 13 「羊飼いと海」

羊飼いが海の近くで羊の群れを飼っていたが、穏やかな海を見ているとふと航海を試みたくなった。そこで羊を売り払いナツメヤシの荷を買い入れて航海に出た。ところが激しい嵐が起こって沈没の危険があったので、船の荷をみな海に投げ出し、空になった船からやっとのことで脱出した。数日後、人がやって来て、穏やかな海をめめていると——じつに穏やかな海だったのだ——羊飼いは答えて言った。「思うに、海はまたしてもナツメヤシを欲しがっている。だからじつと動かない姿を見せているんだ。」

教訓。人は損失と危険によって学ぶ。

天草版下巻 4 「大海と野人のこと」

ある時、野人海辺に出て、海の緑のなごやかなを見れば、あまたの廻船が東から西に行くも有り、鷗の沙に印を刻むもあり、絵に書くとも、筆にも及ばぬ景気に乗じて、心に思ふ様は、「さても我が業ほど、もの憂いことはあるまじい。山野を家にし、田畠に汗を流し、氷を耕し、雨を植ゆることはかやうの料簡を弁へぬ故ぢや。只今から一跡を沽却して、舟の上の商ひをするにはしくまじい」と思うて、農具・牛・馬を売って、その村の串柿を買ひ取って、湊に下って、渡海の便船を得て、むかひの国に渡るところで、にはかに大風が吹いて来て、舟を覆さうとすれば、舟中の荷物をことごとく取り捨てて、やうやう辛い命ばかりを生けて帰った。しばらくして、波風もはや穏やかになり、海上も悠々としたを見て、海にむかうて叱って云ふは、「いかに大海よう聞け。有るほどの串柿は皆汝に与へつ。また先のごとく、わだかま^みって余をたばかるとも、二度串柿をば食らはする事はあるまじぞ」と。

下心。諸職ともに辛勞のあることをまだ知らぬ者は、我が業ばかり苦しうで、人は辛勞のないかと羨み、新しい道をせうとするによって、以前の辛勞よりもなほ大きな苦患に会うて、身を知るもの

ちゃ。

天草版では Valla の羊飼いが百姓に、ナツメヤシの荷が串柿に変わっている。のどかな海に船や鷗が描かれて情景が豊かになる。百姓が海に向かって直接叱って言うところなどもある。滑稽さも混じえながらかなり加筆されている。

Valla 訳は Perry に比べるといくぶん丁寧な状況説明が加わっている。Perry で「船は転覆して、すべてを失って命からがら陸地に泳ぎ着いた」となっている所が、Valla では「沈没の危険があったので、船の荷をみな海に投げ出し、空になった船からやっとのことで脱出した」と描写が細やかになる。また「じつに穏やかな海だった」という説明が念をおすように挿入される。さらには海が椰子を欲しがっているとした後、「だからじっと動かない姿を見せている」とその根拠が加わっている。これらはいずれも Valla が勝手に変更したり付け加えたものではなく、その底本にあったと考えられる。というのも、いまここに挙げた Perry と異なる個所はいずれもギリシア語写本クラス III に現れているからである。¹³

以下各版における字句の対応を整理してみる。

1) Perry 「船は転覆して、すべてを失って命からがら陸地に泳ぎ着いた」

Valla 「沈没の危険があったので、船の荷をみな海に投げ出し、空になった船からやっとのことで脱出した」

天草版「舟を覆さうとすれば、舟中の荷物をことごとく取り捨てて、やうやう辛い命ばかりを生けて帰った」

2) Perry ×

III 「たまたまた穏やかになっていた」

Valla 「じつに穏やかな海だったのだ」

天草版「波風もはや穏やかになり、海上も悠々とした」

3) Perry ×

III 「だから凪いでいるふりをしているのだ」

Valla 「だからじっと動かない姿を見せている」

天草版「また先の如く蟠って身を謀るとも」(東洋文庫による)

「身」は反射代名詞として、一人称・二人称・三人称の別に関係なく実体そのものをさすほかに、中世近世において自称の代名詞として、男子がいくらか優越感を伴って使うという。したがって「身を謀る」は「俺様をだます」といったニュアンスになるかと思うが、Valla の「自身 sese」という再帰代名詞と関連しているようにも見える。Valla の訳を直訳すれば「だから(海は)動かない自らの姿を示している」。

この寓話に関して Valla と Rem. は語彙は違うが内容はほぼ同じである。天草版はこの話で加筆部分が多いので断定はしにくい。Rem. ではなく Valla のみによったと思われる。Valla の「だからじっと動かない姿を見せている」という説明にあたる箇所は Rem. にはない。¹⁴

後置教訓に関しては Perry と Valla の言い回しは異なるが内容はほぼ同じで、賢者は災難を教訓とするといった内容である。しかし天草版の教訓はこのような箴言ふうの言い回しではなく、他人の仕事が楽に見えるからといって職を変えるとさらなる苦難にあうとして、具体的な人生相談の答のような趣である。天草版はこの寓話においては加筆が目立ち、それもあってか情景描写もおかしみも原文を凌駕している。ただ寓話は本来簡潔さが特徴かもしれない。

2. 2 Valla 17 炭焼と洗濯人→ 天草版下巻 5「炭焼と洗濯人のこと」

Valla 17, Barlandus 8, Rem.19, Perry 29

Valla 17 炭焼と洗濯人

借家に住んでいる炭焼人が、最近そこへやって来た洗濯屋を誘った。同じ家に一緒に住もうと。洗濯屋は答えた。それはちょっと難しい。私が漂白したものをなんでもかんでも君が煤で汚してしまうのではないかと心配だ。

教訓。恥ずべき者たちとはいかなる交渉も持つてはならない。

天草版下巻 5「炭焼きと洗濯人のこと」

ある炭焼き洗濯人のもとに行ってみれば、家も広う、間々も多いを見て、「いかに主、わが借用した家は、膝を入るるにも足らず、狭う難儀に及べば、慈悲の上から、この一間を我にお貸しやれ」と云へば、主答へて云ふは、「仰せはもつともなれども、わが身を取ってはかなひ難い。故をいかにと云ふに、余が一七日の間洗ひ清めうほどの物を、そなたの一時召されうことを持つて汚されうずれば、少しの間もかなふまじい」と。

下心。仁者を友にせう人は、悪い者に遠ざからずんば、必ずその名も、その徳も亡びうず。(大塚)

天草版で炭焼が「我が借用した家」と借家であることをわざわざ述べている点は Perry にも Barlandus 8 にもなく、Valla の「借家に住む炭焼き carbonarius conducta in domo habitans」にそのまま拠ったのであろう。単純に考えれば借家なので一緒に住めば安上がりということではあるが、「一つ屋根の下に住む ut eisdem in aedibus una habitarent (Valla); ἀντῶ συνοικῆσαι (III)」という表現を、Valla の後置教訓「恥ずべき者たちとはいかなる交渉も持つべきではない Fabula haec innuit, nullum cum flagitiosis habendum esse commercium」と結び付けて考えると意味は微妙である。¹⁵

Perry の教訓は「似た者同士でないと決して共同作業はできない」(中務訳)で、似ていないものはシェアできない、似た者同士でないと一緒にはなれないというような一般的な意味あいではあろう。この教訓は写本(クラス) I II IIIすべてに共通で、πᾶν τὸ ἀνόμοιον ἀκοινωνητόν (ἐστίν) は直訳すると「似ていないものはなんであれ分かち合えない」のようになるかと思う。¹⁶この箇所を別の校訂者である Chambry は「性向の異なる者たちを結び付けることはできない La fable montre qu'on ne peut associer des natures dissemblables」と訳している。

「仁者を友にせう人は、悪い者に遠ざからずんば、必ずその名も、その徳も亡びう

ず」という天草版の下心は、「恥ずべき者たちとはいかなる交渉も持つべきではない」という Valla の後置教訓に拠っているのではないかと思うが、この話はドルプ本中に Barlandus による訳もあって、その後置教訓は「私たちはこの寓話によって、非の打ちどころのない人々と道を歩むよう勧められ、悪徳に染まった者たちとの付き合いを疫病のように避けよと忠告される Monemur hoc apologo cum inculpatis ambulare; monemur sceleratorum hominum consortia veluti pestem quandam devitare」となっている。寓話本体部分はあきらかに別であるが、この教訓部分だけは天草版が Barlandus に拠ったかもしれない。

2. 3 Valla 11 病人と医者→天草版下巻 6「病者と医師のこと」

Valla 11, Rem. 73, Hausrath 180

Valla 11 病人と医者

ある病人が調子はどうかと医者に問われて、異常な発汗で体が弱っていると答えたが、医者は大丈夫だという。翌日問われたときには、長いあいだ悪寒が続いて苦しいと答えたが、医者は大丈夫だいう。三日目に問われたときは、下痢に悩まされていると答えたが、医者はまだ大丈夫だという。後で家人に調子はどうかと尋ねられると、まだまだ大丈夫だがもう死にそうだと病人は答えた。

教訓。この寓話が教えるのは、へつらう者たちは糾弾されるべきだということ。

天草版下巻 6「病者と医師のこと」

ある医師一人の病者のもとに見舞ひ、気分の趣を問ふに、病者の云ふは「今宵鶏の鳴く時分から今まで、汗の出ることは車軸を流すごとくぢゃ」と云へば、医者云ふは「一段それは希うことぢゃ」と。その翌日また来て、「気分は何と」と問ふに、病者の云ふは「今朝よりしたたか震ひ付いた」と。医者は「一段これもよいことぢゃ。」またその翌日来て、「いかに」と問ふに、病者の云ふは、「昨日の暮れほどから小腸のあたりがくるやうに痛うて瀉することが度々に及ぶ」と。医者云ふは、「それはすぐれてよい証ぢゃ」と云ふて往んだ。病者看病する人に云ふは、「医者は今まで出来るほどの病をば皆良い良いと云はるれども、余ははや死ぬるに近い」と。

下心。追従ばかりで人をへつらふ者の云ふことを信ずるな。その言葉の下から大事が起こらうず。

寓話そのものに関して Valla の訳は Perry とほぼ同じであるが、後置教訓はかけ離れている。Perry では「多くの人が、自分では最も苦しんでいる正にそのことで、外からしか判断しない隣人によって幸せ者扱いされている。」はた目には幸せそうに見えても本人は苦しんでいることがあるといった意味合いであろう。これに対し Valla の教訓は極めて簡潔で実質 2 語である。「へつらう者たちは糾弾されるべきだ (Haec fabula innuit) coarguendos assentatores」寸鉄人を刺すというが、英語の argue や assent とも関連のある語が含まれる。この寓話そのものは、病人を安心させようとしてか、それともやぶ医者だからなのか、大丈夫だと言い続ける医者がやり玉にあがるが、Valla の教訓からは、付度するイエスマンは然るべき場で喚問されねばならないといった感じもある。天草版は Valla に拠りその意味を正確に捉えたうえで表現を変えた名訳であろう。「追従ば

かりで人をへつらふ者の云ふことを信ずるな。その言葉の下から大事が起こらうず。」

Valla の教訓は Perry とはかけ離れていて Valla 独自のもののようにも思えるが、どうも Valla が用いた写本のせいのようなのだ。写本の系統 III γ (Hausrath) では後置教訓の部分が「(この話は) おもねる者たちを揶揄している (ὁ μῦθος ἐλέγχει τοὺς κολακεύοντας) となっていて、これを Valla が「(この話は) おもねる者たちは糾弾されるべき (だと示唆している) (haec fabula innuit) coarguendos assentatores」とし、さらにこれを今度は天草版が敷衍して「追従ばかりで人をへつらふ者...」としたと推測される。わずか 2 語の Valla の教訓を、表現は違うが天草版は正確に解きほぐしていると見てよい。

3 ドルプ本無名氏訳

ドルプ本の目次には掲載されていないが、本文には訳者不詳 *incerto interprete* とある。1505 年の Aldo Manunzio によるギリシア・ラテン対訳本イソップから 78 話のラテン語訳を取り込んだもの。天草版はここから 18 話ほどとる。

3. 1 無名氏訳 *incerto interprete* 3→天草版下巻 9 「鶏と犬のこと」

無名氏訳 *incerto interprete* 3

同盟を結んだ犬とオンドリが旅をしていた。夕闇が迫るとオンドリは木に登って眠り、犬はその根元で番をした。オンドリはいつものように暗いうちからコケッコウと鳴く。これを狐が聞きつけてさっそく駆け寄ってきて、木の下に立ちオンドリに降りてくるよう頼んだ。とても素晴らしい歌声の動物を抱きしめたいというのだ。オンドリは答える。その前に根元で寝ている門番を起こしてくれ、そいつが門を開けてくれたら降りていくからと。そこで、オンドリを呼んでくれと狐が声をかけると、たちまち犬が飛び出してきて狐をずたずたにしてしまった。

教訓。この寓話が教えるのは、賢い者たちは襲ってくる敵たちを策略によりもっと強い者たちに向かわせるということ。

天草版下巻 9 「鶏と犬のこと」

ある時、鶏と犬とうち連れだつて野遊びしたに、日が既に暮るれば、鶏は梢に上り、犬はその木の根元に眠った。さうある所へ、狐そのあたり近く居たが、鶏の暁歌を聞いて、走って来て、木のもとに寄って云うたは、「いかに鶏、久しう見ませぬ。ことには一曲の妙な声が世に隠れない。一節承らうずる為に参つたれば、少しの間ここにおりゃれ」と云へば、鶏答へて云ふは、「真にその以後は久しう対面申さぬ。ゆかしう存ずるところに、お尋ねは忝い。やがてそれへ参らうず。まづそのあたりに召し置いた、私が隨身を起させられい」と。狐は真かと心得て、「誰かある？誰かある」と叫ぶほどに、犬は眠りをさまして、たちまち狐に飛び掛って、ただ一口にかみ殺いた。

下心。賢才の有る人は、わが敵を手づから害せねども、また我よりも強い者をもって、殺さすものぢや。

Perry (中務訳)の後置教訓「このように人間の場合でも、賢い人は禍が襲って来ても容易に対抗する、ということをこの話は説き明かしている」に対して無名氏訳は「思慮のある者たちは襲ってくる敵たちを策略でより強い者たちへと向かわせる (Fabula

significat.) prudentes homines inimicos insultantes ad fortiores astu mittere.] Perry の「禍 τὸ κακὸν」という抽象名詞が、無名氏訳では「襲ってくる敵たち inimicos insultantes」と具体的である。これはそれぞれのギリシア語底本の違いに帰着し、後者は τοὺς ἐχθροὺς ἐπελθόντας を訳したものである。Perry の教訓がやや抽象的で一般的な禍への対処法とするなら、無名氏訳は具体的で、襲ってくる敵の矛先を変える戦略である。ここで天草版は強い者に殺させると露骨である。

この寓話の場合、このようなシンプルで具体的な教訓は、だれしも簡単に導き出せる。だからあえて教訓部分の典拠を求めようとしても典拠だとは断定しにくい。天草版が無名氏訳に基づくとすれば、「手づから害せねども」を付け加えて、比較級で出る「より強い者たち fortiores」を「我よりも強い者」として写し、「襲ってくる敵たちを策略でより強い者たちの方へと送る inimicos insultantes ad fortiores astu mittere; τοὺς ἐχθροὺς ἐπελθόντας πρὸς ἰσχυροτέρους πέμπουσι παραλογιζόμενοι」という原文を、端的に「我よりも強い者をもって殺さす」と表現したと考えられる。

3. 2 無名氏訳 incerto interprete 4 →天草版下巻 10「獅子王と熊とのこと」

無名氏訳 incerto interprete 4

ライオンと熊がほぼ同時にラバの子を見つけて、これをめぐって争ったが、お互い激しく体力を消耗し、激闘で頭は朦朧となり、疲れてはてて座り込んでいた。そこへ狐がやって来た。二匹の猛獣がへたばり、その間に倒れているラバの子を見つけると、二匹の間に割り込んで、これをさらって逃げていった。二匹は狐を目にはしたが、立ち上がることもできない。お互いに交わした言葉は「狐のために骨を折ったとは残念至極。」

教訓。この寓話が教えるのは、人が骨を折っているときに利益を得る者がいるということ。

天草版下巻 10「獅子王と熊とのこと」

ある時、羊の子一匹、熊と獅子との二つの手に掛って死んだ。この二つの獣、互に自他の勝負を争うて、朝から夕さきまで戦へども、つひにその勝ち負けが見えいで、争いくたびれて、両方にたち別れて居るところに、狐が余所からこれを見て、二つの中に置かれた羊を取ってくらうた。二匹の猛い獣ども「さても安からぬ狐が働きかな」とは思へども、さすがに大敵を前に置いたれば、小敵を拒むに足らいで、くらわれた。

下心。両方から争ふ者を、中から出て取ることは多い物ぢや。鶉蛙があひ争うて、二つながら漁人の手に落つるといふも、これらのことを云ふか。

天草版は全体的にある程度潤色がみられるが、ほぼ内容は同じと見てよい。強いて違いを挙げれば、狐に餌食を「食らわれた」とし、その理由を挙げて、大敵を目の前にしているのが小敵を防げなかったというあたりか。ライオンと熊が地団太を踏む様子が想像される。

3. 3 無名氏訳 incerto interprete 10 [Dorp] →天草版下巻 11「食欲な者のこと」

無名氏訳 *incerto interprete* 10

ある欲張りが、自分の全財産を売り払って金塊を作り、ある所に埋め——同時に自分の魂と理性もそこに埋めてしまったのだが——毎日やって来て金塊を眺めていた。その様子を見ていたある日雇い人夫が、このことを知って、金塊を掘り出して持ち去った。その後、欲張りがやって来て、埋めた場所が空になっているのを見ると、髪をむしって嘆き始めた。このように嘆き悲しんでいるのを見たある人が、そのわけを聞いてからこう言った。「そんなに悲しむのはやめなさい。あなたは金塊を持っていながら持ってなどいなかったのですから。金塊の代わりに石塊でも拾って埋めておきなさい。そうしてそれが金だと信じるのです。あなたにとっては同じくらい価値があるでしょう。どうもあなたは金を持っていた時も、金を使わなかったようですから。

教訓 財産は使わなければならないも同じ。

天草版下巻 11「貪欲な者のこと」

ある貪欲な者、一跡をことごとく沽却して、金子百両を求め、人も行かぬ所に穴を掘って、深く隠せども、それもなほ疑はしうて、毎日その所に行つて見舞うた。さうあれば、ある人、かの者の日々に同じ所へ行つては帰り、行つては帰りするを見て、大きに怪しみ、隙うかがうて、かの所をようよう見れば、くだんの穴を見付け、それをことごとく取つて帰つた。その翌日いつものごとく行つて見れば、穴も掘られ、黄金も無いことを仰天して、五体を地に投げ、もだえ焦れて泣き嘆くところに、ある人そこを通つたが、かねてそのことを知つたか、嘲つて云ふは、「御辺の気遣いは無益ぢや。そなたの賢い謀をもつて、その悲しみをおなだめ有れ。まづ石を取つて、くだんの金子の重さに掛けて、その穴にお隠しやれ。さてそなたの心には、黄金ぢやと思ひおなしやれ。それをなぜにといふに、黄金を使ひもせず、家にさへも置かいで、山野の土の中に埋むる事は、石と同じことではないか」と云うて去つた。

下心。たとひ金銀を山ほど積んで持つとも、使はいでたくはゆる人は、石を持ったも同前ぢや。[同然]

天草版は多少丁寧な描写になり分量がある程度増えている。ただし金とともに心も埋めたという挿入的な説明は省いている。嘆きの様子は、西欧では髪をかきむしるが、我が国では「五体を地に投げ」となる。五体投地というのは仏教用語で両膝・両肘・頭を地につける最敬礼というが、ここでは貪欲な者の嘆きを僧の所作に重ねてユーモラスに揶揄しているともとれる。

4 ドルプ本から天草版下巻へ

ドルプ本の中で Valla 13 は Rem.91 と Valla 17 は Barlandus 8 と競合しているが、Valla 13, 17, 11 がある程度の脚色されて、それぞれ天草版下巻 4「大海と野人のこと」、5「炭焼と洗濯人のこと」、6「病者と医師のこと」に訳されていったことはほぼ明らかになったことと思う。天草版は原典を削ることはそうない。本稿で取り上げた 6 話に関して訳を外しているのが特に目についたのは、貪欲な者が全財産を埋め隠すときに、自分

の魂と理性まで埋めたとする語り手の注釈的な付加部分くらいである。加筆はしばしば見られる。訳としてわかりやすくなるようにという意図から生じたものであろう。そのせいで全般的に分量が底本に比べると若干増えている印象がある。ときに「大海と野人」のように、情景描写をするのに興がのったか、はっきりそれと分かる創作部分もある。

Valla の訳は、その底本が属すると推測されているⅢに近いことも判明した。上で見たように Perry とⅢに違いがある場合、天草版はいずれもⅢすなわち Valla に近い。このこともドルプ本が天草版の底本であることの傍証にはなるだろう。したがってここで取り上げた3話に関しては、写本系統Ⅲから Valla を経て天草版に至る流れで失われた部分は少ないと考えてよいのではないか。逆に天草版では多少の加筆によって、海を皮肉る羊飼（あるいは叱りつける百姓）も、煤の汚れが嫌いな洗濯屋も、良い良いという医者（あるいは）を信じて死にかけている病人も、描写に念が入ったぶん登場人物はいっそうユーモラスになっているように感じられる。

とりあげた無名氏訳の3話が、天草版下巻9「鶏と犬のこと」、10「獅子王と熊のこと」11「貪欲な者のこと」として訳されたことに関しては特に問題はないだろう。おそらく無名氏訳が逐語訳に近いという性格上、ある意味 Valla の場合よりも寓話本体部分も後置教訓もその底本に近いと考えられる。天草版の翻訳態度は Valla における場合と変わらない。

Valla の後置教訓は短くて鋭い。底本通りの訳でない場合もあるが、その場合も意味をくみ取って訳しているとみられる。これに対して無名氏訳は後置教訓においても原文に逐語的に——ただし構文上無理が生じる場合は別——訳しているようだ。Valla も無名氏も簡潔な後置教訓という点では一致する。これに対し天草版は後置教訓においても、簡潔さよりわかりやすさを志向している。寓話本体部分とは違って、たとえば「大海と野人」でみたように、教訓部分がかなり変わってしまうこともあるようだ。

興味をひかれて翻訳と底本の関係を調べてみた。自分ではできる限り辞書は引いてみたが、覚束ない語学力によるおかしな訳は大目に見ていただきたい。ドルプ本のなかで天草版に関わる45話を（訳者重複分も含んで）ルネサンスか西洋古典の研究者に訳してもらえれば、天草版研究にとっても面白い発見がありそうな気がする。

終わりに

明治の終わりに新村出はポルトガル式ローマ字綴りの天草版を大英博物館で書き写した。昭和の小堀は印刷揺籃期ゴシック活字のシュタインヘーヴェル羅独本のローマン体活字による復刊を利用した。ただ一つしかない天草版も、希少な羅独本も、さらにはスペイン語版も、ドルプ本も、これらに関連する研究書も今ではネットで閲覧が可能であり、以前に比べると各版の比較は少なくとも物理的にははるかに容易である。

新村が祖本説を仮説として出した時の言い回しは極めて慎重なものであった。¹⁷ 文語祖本説以前に戻って、新村の天草版訳者ハビアン説や、新村のほかに水谷不倒「新撰

列傳體小説史」が国字本の訳者の可能性として名を挙げる烏丸光広を考え直してみることはできないだろうか。以下いくつか関連しそうな点を断片的に拾ってみる。

*「細川幽斎も一時耶蘇教に帰したといふ一説...もある位であるから、光広が『伊曾保物語』の翻訳者であらうとの考へは今直に其人とは断定出来ぬけれども、見当は大抵外れまいと思はれる」(明治 43)『新村出全集』第七巻(1973, p. 389)「西洋文学翻訳の嚆矢」より。

*「活字本 [国字本] の作者に就いては、烏丸光廣であらうといふ説は、既に古人の間にも行はれてみた」(昭和 4)『水谷不倒著作集』第一巻 (1974, p.36)「新撰列伝体小説史」より。

*天草版の訳者は不干斎ハビアンだとする推測は新村以来。訳者として他の名を挙げる研究者もいる。

*ロドリゲス『日本大文典』1604-08には天草版・国字本両方から引用がある。

*『日葡辞書』(1603-1604)には天草版からの引用しかなく、国字本からはない。この時点で国字本は成立していなかったか——大文典との差はわずか1年ばかり——、辞書の編者に知られていなかったか、編纂には間に合わなかったか。この辞書の編集期間は4年であり、ロドリゲスは関わっていなかったという。

*慶長・元和 (1596-1624) 頃に古活字本が出版されたと推測されている。ただし活字となる前の翻訳手稿ないし写本のようなものがあつたはずで、それが書かれたのをここでは成立時期としてみる。

*「如電翁が慶長五年[1600]以降を以て、国字本の『伊曾保』の成つた時と定められたその根拠は取ることは出来ぬが、時代は略々当たつてゐると思ふ」(明治 43)『新村出全集』第七巻 (1973, p. 389)「西洋文学翻訳の嚆矢」より。

*不干斎ハビアンは 1603-08 年に京都に滞在している。

これらをつき合わせると国字本の成立は 1603 年頃、少し幅をとれば 1600-1604 年となりはしないか。天草版と国字本の訳者として名が挙がる二人が出会つたとしたら。ここからは上に挙げた断片的な情報をつき合わせただけの全くの想像である。1603 年ころ、かつて禅僧で今は切支丹で後に棄教することになるハビアンがローマ字綴りの天草版上巻とスペイン語版イソップ寓話を携えて京都に出かけ、そこでこの年、細川幽斎から古今伝授を受ける公家の烏丸光広と出会う。ハビアンがイソップ伝と寓話部上巻 25 話を示し、これを光広が 1 話削って文語に訳し、さらにスペイン語版から 40 話をハビアンが訳して光弘が文語訳し、多少順を変更しながらも全体としてはほぼ原典の順に挿入し国字本が成立した。ただし天草版下巻もすでに成立しているはずだが、これと国字本とは接点がみつからない。

前稿兵頭 (2021) の訂正箇所

左が誤、右が正。

p.9 『イソップ詩』:『いそっぷ詩』; 中務哲朗: 中務哲郎; 『寓話集』:『寓話』; アテネの商人: アテネの

市民 p.14 国字中 10-14: 国字中 11-14 ; 国字中 15: 国字中 8, 10, 15 p.15 取り入れていれで : 取り入れて p.16 19 世初め : 19 世紀初め p.17,18 Gulielmus : Guilielmus ; p.18 第 3 四半期世紀 : 第 4 四半世紀 p.20 中にあったと : 中に智慧があったと p.25 Barl.に拠る圧縮 : Barl.が圧縮 p.28 冒頭 : 文頭 p.29 Ammonio wyler : Ammonio dem wyler p.30 はるかによそ : はるかによそに p.32 あるけれどもが : あるが p.33 申すさるれども : 申さるれども p.35 こと示唆 : ことを示唆 p.37 clarisismo : clarissimo p.41 A.Gibbs : L.Gibbs ; 森 : 森田 p.42 1942 年版 : 1542 年版 ; 注 20 参照 : 注 19 参照。

さらに p.40 のドルブ系と天草下巻の対応表で、ドルブ本の訳者の重複に関して、遠藤 (p.481 以下) と対照した結果、10 箇所近く見落としがあり、なお遠藤にも 2 箇所欠落があったが、煩雑になるのでここには記さない。

参考文献

- 井上章『天草版伊曾保物語の研究』風間書房 1968
- 江口正弘『天草版伊曾保物語』新典社 2011
- 遠藤潤一『邦訳二種伊曾保物語の原典的研究 総説』風間書房 1983
- 大塚光信『キリシタン版エソポ物語』角川文庫 1971
- 小堀桂一郎『イソップ寓話その伝承と変容』講談社学術文庫 2001
- 『新村出全集』第 7 巻 1973
- 新村出・柊源一『吉利支丹文学集』東洋文庫 1993
- 中務哲郎『イソップ寓話集』岩波文庫 1999
- 兵頭俊樹「『伊曾保物語』の翻訳底本から文語祖本説の再検討へ」和歌山大学クロスカル教育機構研究紀要 第 2 号 2021, p.8-44.
- ローレンス・マルソー『絵入卷子本伊曾保物語』臨川書店 2021
- 『水谷不倒著作集』第 1 巻 1974
- 森田武『伊曾保物語』(日本古典文学大系『仮名草子集』) 岩波書店 1965
- 吉川斉『「イソップ寓話」の形成と展開』知泉書館 2020
- Heinrich Steinhöwel: Aesopus. Fabulae Sammlung des Heinrich Steinhöwel. ca.1476
- Aesopi Phrygis et aliorum fabulae, Lugduni (Lyon) 1536.
- Las fabulas del clarisismo y sabio fabulador Ysopo, nuevamente emendadas. 1546
- Dieter Beyerle: Der spanische Äsop des 15. Jahrhunderts. *Romanistisches Jahrbuch*, vol. 31, 1980. p.312-338.
- Paola Cifarelli: Fables: Aesop and Babrius. in: *The classical heritage in France*. 2002. p.425-452.
- J.E.Keller & L.C.Keating (tr.): *Aesop's Fables, with a life of Aesop*, University Press of Kentucky.
- Hermann Österley: *Steinhöwels Äsop*, Tübingen 1873.
- M.P. Pillolla: *Laurentius Vallensis Fabulae Aesopicae*. Genova 2003.

¹ 小堀 (p.182) は天草版下巻と国字本がほとんど共通するところがないという問題に関して、『ハブラス』(天草版) 下巻 45 篇の全てと話の配列の点で一致するようなラテン語原本がもし発見できればこの問題は一気に解決する」と述べる。巻末に付された伝承系統の表では文語祖本は 1580 年代かという推測年代が記されているが、その根拠は述べられていない。天草版の成立 1593 年から推測したものであろう。小堀はまた文語祖本説という「有力な見解を疑うだけの材料を持ち合わせていない」(p.174) といくぶん含みを残した言い回しもしている。ラテン語原本の発見によって祖本説が覆る可能性も考えていたろう。

² ドルプ本では無名氏による訳 (incerto interprete) となっているが、Aldus 版(1505 以降)のラテン語訳から採ったものである。cf. P. Cifarelli, p.445. Aldus 版については邦語文献では遠藤、吉川に言及がある。

³ 国字本の「イソップ伝」中の話で、中巻 9 に挿入された「鼠蛙」と中巻 10 の「庭鳥」の二つの話は、シュタインヘーヴェル寓話部から採られているので話数に含んだ。また Odo of Cheriton からと思われる 2 話 (国字本下巻 17, 34) は数に含んでいない。

デジタル化されたテキストへのリンク例。

シュタインヘーヴェル羅独版 Heinrich Steinhöwel: Aesopus. Fabulae Sammlung des Heinrich Steinhöwel.

<https://opacplus.bsb-muenchen.de/search?id=644599820&db=100&View=default> (2022 年 2 月 3 日閲覧)

同系スペイン語版(アントワープ 1546) Las Fabulas del clarissimo y sabio fabulador Ysopo...

<https://archive.org/details/LasFabulasDelClarissimoYsopo1546> (2022 年 2 月 3 日閲覧)

ドルプ本 (リヨン 1536) Aesopi Phrygis et aliorum Fabulae, Lugduni 1536.

https://archive.org/details/bub_gb_01FWx9Y4_uMC/mode/2up (2022 年 2 月 3 日閲覧)

⁴ 天草版下巻 7, 25 の 2 話については前稿で検討し、複数の訳者からミックスしながら取っているのではないかと推測した。ドルプ本は遠藤が述べる天理図書館本をも含み、16 世紀から数世紀の間版を重ねている。シュタインヘーヴェルの復刻本の編集校訂をしている Österley もドルプ本を参照し、リヌッチョ訳の部ではシュタインヘーヴェル本とドルプ本の順の対応を脚注に記している。

⁵ 大塚に基いたが、最後の「用ようずる儀ぢゃ」という表記は国立国語研究所の日本語史研究用テキストデータ集/天草版伊曾保物語/ローマ字・漢字かな翻字対照テキストに拠った。

⁶ 天草版のテキストは東洋文庫、大塚、国立国語研究所の翻字を、国字本は大系本と大塚を参照した。

⁷ スペイン語版での「力」は一義的には、虐げられた者たち自身が悪人たちに対抗して用いる力であるが、天草版の「権柄」は虐げられた者たちが他から借りる力、たとえば今日なら警察のような公権力に変わっているとみるべきか。

⁸ 小堀 p.152-53 はこの韻文バージョンをアデマル集としているが勘違いであろう。cf. P. Cifarelli (p.437): the first three books of this collection also contain the text of *Anonymus Neveleti*, or *Romulus* of 'Walter of England'. また cf. L.Gibbs: *Aesopica* (Web): Walter of England (Gualterus Anglicus) in the 12th century, although you will also see the collection referred to as the *Anonymus Neveleti* (because it was included by Isaac Nevelet in his *Mythologia Aesopica* of 1610).

¶ Esta fabula significa que cerca de los malos y falsos no ha lugar verdad ni razon, ni vale otra cosa contra ellos salvo la fuerza sola. E semejantes lobos se hallan en cada lugar los quales por tyrania buscado ocasiones beuen la sangre & afan delos inocentes y pobres.

1546 年スペイン語版 52v

¶ Esta fabula significa que cerca de los malos y falsos no ha lugar verdad ni razon, ni vale otra cosa contra ellos salvo **la fuerza sola**. E semejantes lobos se hallan en cada lugar los quales por tyrania buscando ocasiones beuen la sangre & afán delos inocentes y pobres.

(子音の u は v に、ç は z に、縦長のエスは s にした。n の略字は戻した。改行のハイフンは対照の便を考えて残した。天草版の「ただ権柄ばかり」の由来と考えられる箇所を太字にした。)

This fable signifies that among the false and evil there is no place for truth or reason nor is anything else effective against them save **force alone**. And wolves of this sort are found everywhere, seeking an opportunity through tyranny to drink the blood and profit by the zeal of the innocent and poor. (同じ部分の 1489 年スペイン語版の Keller & Keating による英訳)

¹⁰ 本稿では悪人に対する権柄という意味で解釈しているが若干私には不明な点がある。助動詞「うず」の用法について。「うず」の用法を日本国語大辞典から引けば、「①意思、決意を表わす。…しようとする。…しよう。②話し手の推量。…だろう。③相手に対する勧誘、または命令的な意を表す。④当然、適當の意を表す。…のはずだ。…して当然だ。…のがよい」などがある。天草版のこの部分の解釈に関して研究書を覗いてみると、「悪人はそれを踏みにじて権力ばかりを用いるだろうという事だ」(井上 p.783)、「それはただ権勢をもって他を抑えようとするものである」(江口 p.174) とあり、「うず」の用法としては前者は②、後者は①となるが、権柄に関しては両者ともに悪人が用いる権柄という解釈である。これには句読点の問題も絡むと思われる。国立国語研究所のローマ字・漢字仮名翻字対照テキストから引用する。

Coreuo nanzotoyūni:dōriuo sodatenu acuninni taixiteua jenninno dōrito,sono fericudarimo yacuni tatazu:tada qenpei bacariuo mochiyōzuru gui gia.

これを何ぞと言うに：道理を育てぬ悪人に対しては善人の道理と、その遜りも役に立たず：唯権柄ばかりを用ようずる儀ぢゃ。

今日のコロンの用い方とは少し違うようであるが、これによれば「道理を育てぬ悪人に対しては」に直接「唯権柄ばかりを…」が掛かっていくのではないかもしれない。いっぽう日本国語大辞典(精選版)の「権柄」の項目には天草版のこの箇所が中略で引用されている。「ダウリヲ ソダテヌ アクニンニ タイシテワ<略>タダ qenpei (ケンペイ) バカリヲ モチヨズル ギ ギャ」。精選版で<略>とされている部分は完全版では[ゼンニンノ ダウリト、ソノ ヘリクダリモ ヤクニ タタズ]。精選版の略し方からすれば、悪人に対する権柄で間違いなさそうである。この「うず」は④の用法となる。

ところがもう一つ気になることがある。この「狼と羊」の話のすぐ後に続く「犬と羊」の話の下心にも権柄という語が現れる。「人に仇を成したがる悪人は権柄を本として、道理に似た託け^{かこつ}を求むる事は常の事ぢゃと言う心ぢゃ」。こちらの権柄は悪人が用いる権柄である。天草版の権柄はこの2箇所だけである。権柄づくの悪人には他の権柄に頼って立ち向かえということになるか。

- 11 分かりにくいせいであろう。マルソー (p.125) は「権力と威力をもって覆すか、或いは我慢をもって耐えるかの二つの方法で対抗すべきだ」と注を付けている。
- 12 写本などについては吉川 (p.167 以下) によって教えられ、近づくきっかけとなった。
- 13 この話は Rem.91 にもある。前稿では気づかず p.40 の表 2 からは漏れている。ただ天草版が Rem.91 から取り入れた形跡はない。
- 14 なお Valla と Rem.のこの部分の違いは、それぞれの底本の写本系統ⅢとⅡの違いを反映しているとみられる。「動かない」*immotum* (ドルプ本) は、吉川 (p.189) では「無害の」*innocuum* (Valla 印刷本 1473-74) であるが、これは Valla 訳の写本の違いに行き着くだろう。
- 15 「恥ずべき」と訳した *flagitiosus* は‘shameful, disgraceful, infamous’など、また「交渉」と訳した *commercium* には‘trade, intercourse, sexual intercourse’などの意味がある。Valla の訳はセクシュアルなニュアンスをくみとったうえで、これを非難しているようにも感じられるが、考えすぎかもしれない。
- 16 ヴァッラの訳を写本にまで遡って研究している Pillolla (p.123) はこの箇所について、ギリシア語原文は概括的で抽象的な表現であるが、Valla のは文字通りの訳ではないと述べている。
- 17 天草版に関連する明治 44 年の記述は「ロドリゲズの『日本大文典』には『エソポ』の和訳文が実例に引用されてゐる。文禄本に由つたに違ひない」と確信に満ちた表現であったが、文語祖本説に関連する昭和 3 年の記述は「文禄本は、直接に拉丁の原本から口訳したのではなくて、その以前に或は既に存したかも知れぬ所の文語訳本の一異本に基いたのであるかもしれない。…なほ綿密なる考証は之を後日に期したい」と慎重な言い回しである。